

子ども同士のつながりを大切に

— 「令和6年度実践報告会」の報告 —

大阪大学医学部附属病院分教室

1 はじめに

刀根山支援学校では、毎年12月に事例をベースにした実践報告を行い、成果と課題を共有する機会を設けている。今年度は大阪大学医学部附属病院分教室（以下、阪大分教室）が報告を行った。

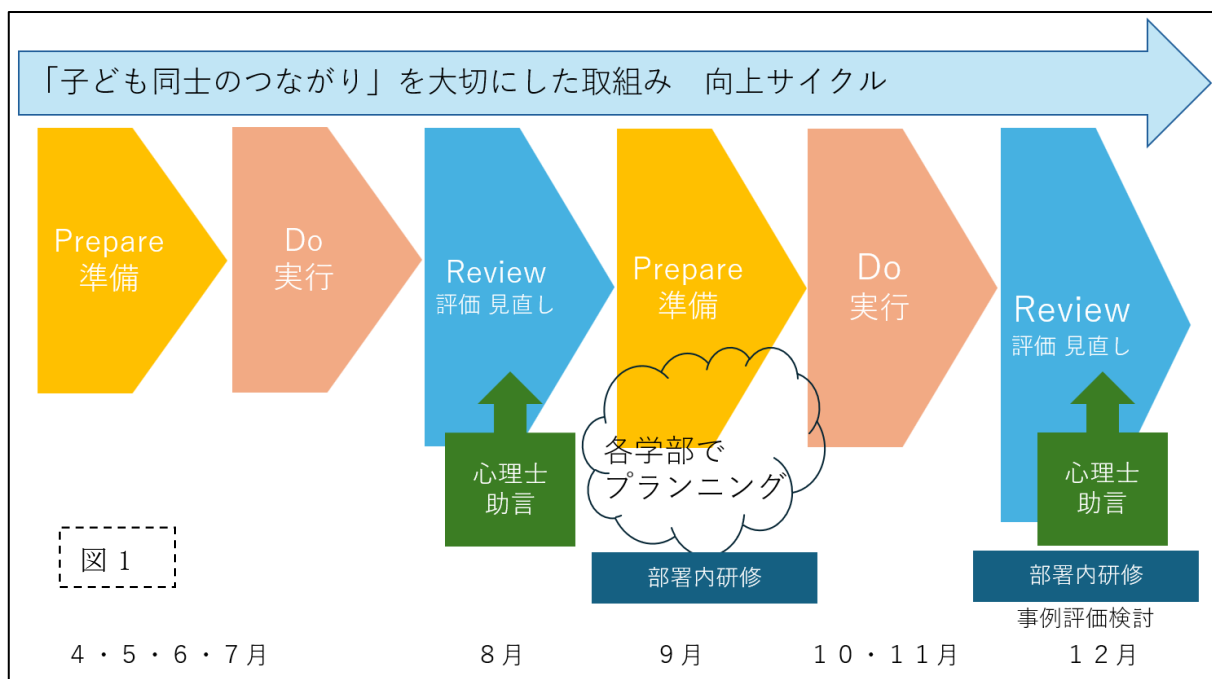
大阪大学医学部附属病院（阪大病院）には、循環器系疾患、悪性腫瘍など、さまざまな疾患で子どもたちが入院している。また、入院期間にも幅があり、数週間の場合もあれば1年以上の長期に渡る場合も少なくない。治療や服薬・投薬による体調や気持ちの不順、食事や水分の摂取制限や、行動制限などの中で、子どもたちは入院生活を送っている。

このように「患者」としての生活を送ることの多い子どもたちにとって、院内学級はどのような意味を持つのであろうか。また、私たち分教室教員はどのようなことを大切に、入院している子どもたちに接することができるのであろうか。

今年度阪大分教室では「子ども同士のつながり」を観点に実践を重ねた。また「Review（評価・見直し）」において、教員のふり返りに加えて、阪大病院患者包括センター心理士の和田奈緒子先生にご助言いただくことで、サイクルの質を高めた（図1）。

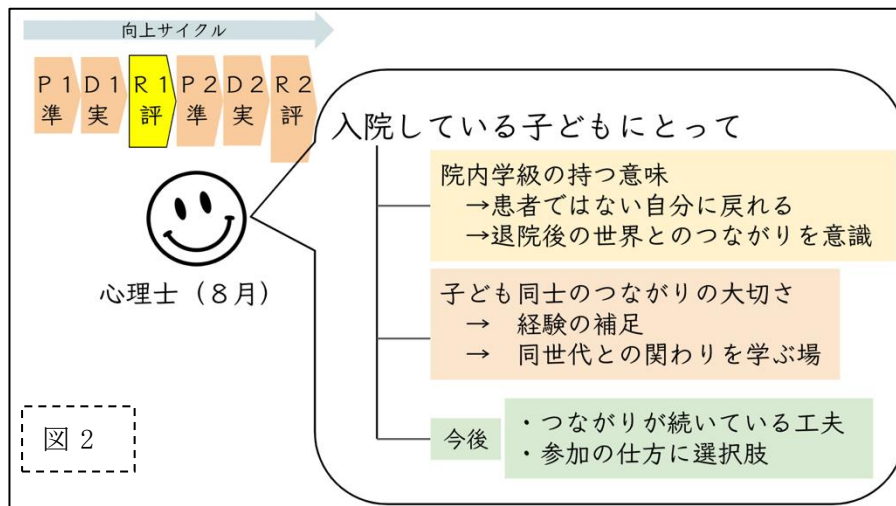
実践報告会では、実践の報告後、和田先生にご助言いただくとともに、入院する子どもに接する際に心理士として大切にしていることについてご講演いただいた。

本稿では、実践を概説し、2回目の「Review（評価・見直し）」と和田先生のご助言、そこから見出された今後の実践におけるポイントを報告する。



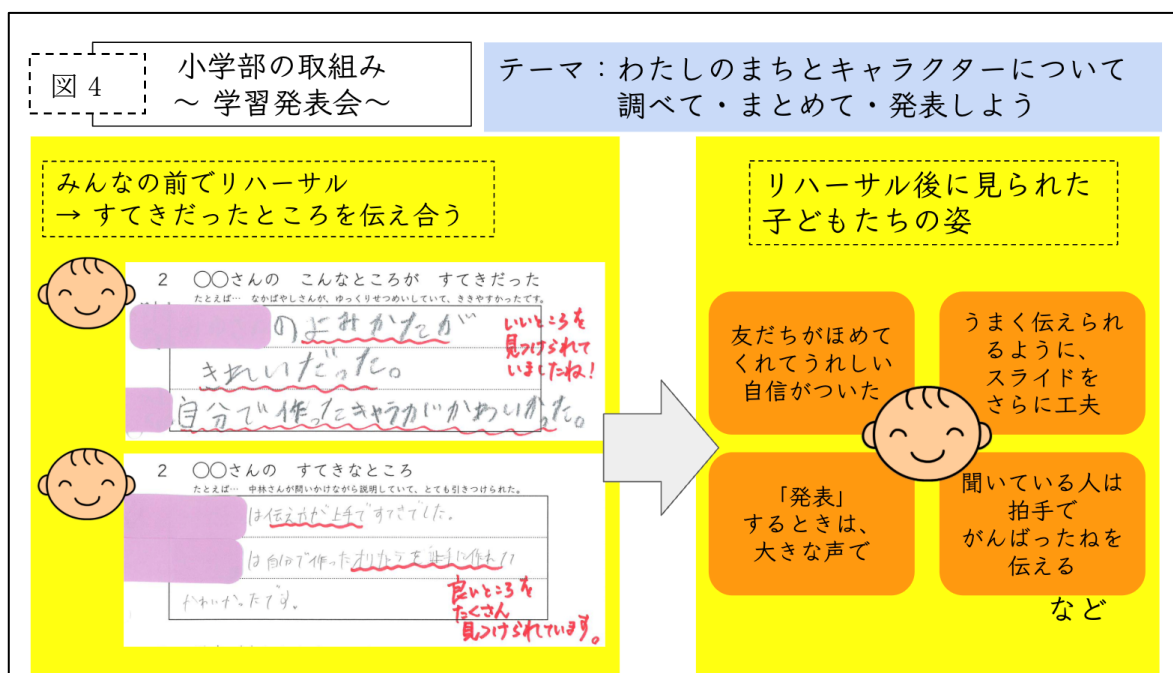
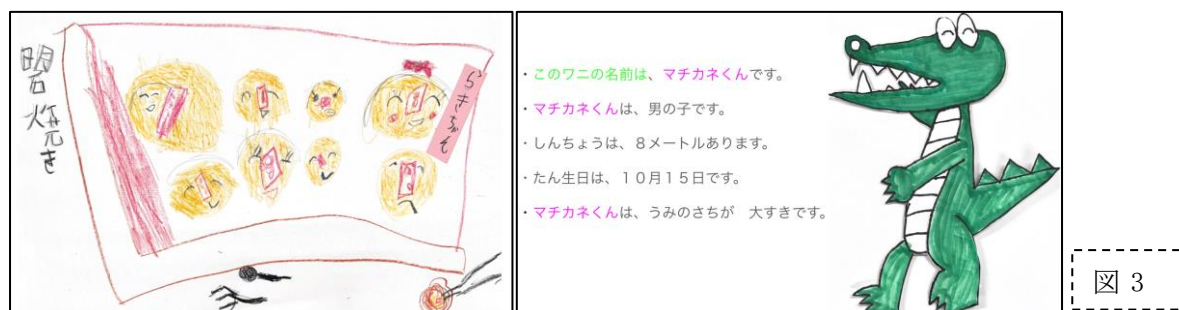
2 実践の概要

1 学期の実践を経て8月に和田先生よりご助言をいただいた（図2）。入院する子どもたちにとって、院内学級の持つ意味や、つながりを大切にしたいこれまでの実践の重要性を改めて認識することができた。この助言をもとに、9月から12月にかけて計画と実践を行い、実践報告会においては次の三つの取組みを報告した。



（1）小学部：学習発表会「わたしのまちとキャラクター紹介」

各自が親しんだ地域や、地域のキャラクターについて調べてスライドにまとめ、発表する取組みである（図3）。オリジナルキャラクターを作成する児童もいた。取組みを通して、児童の姿に変化があった（図4）



II 校内研修

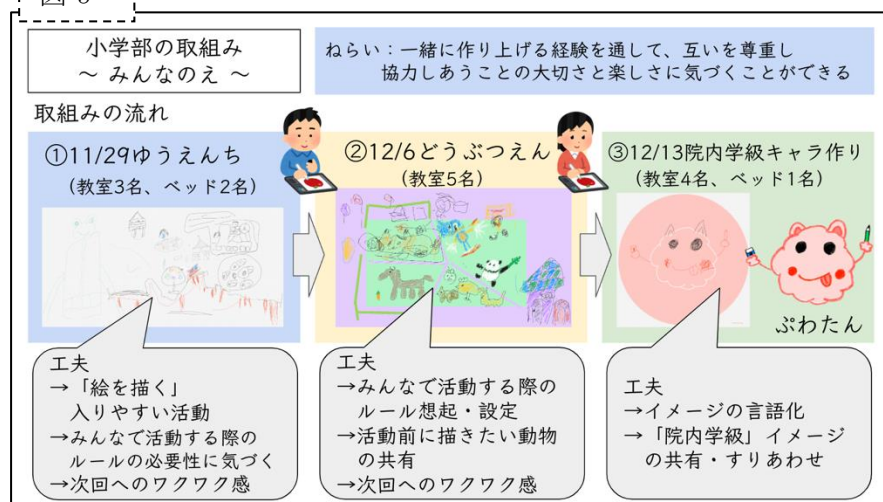
(2) 小学部：「みんなのえ」

児童それぞれが一つの画面を共有しながらタブレットで絵を描き、「ゆうえんち」や「どうぶつえん」「院内学級キャラクター」「おみせ」などのテーマに沿って協働して絵を完成させる取組みである（写真1）。ICT機器を活用し、教室で学ぶ児童とベッドサイドで学ぶ児童と一緒に活動できるように環境を整えた。



写真1

図5



「みんなのえ」の取組みを通して、児童は様々な気づきを得て、学びを深めていった（図5）。ある児童は「ゆうえんち」をみんなで一緒に作り上げる経験を通してルールの必要性に気づき、次の「どうぶつえん」の活動前にルールを提案することができた。

また、「院内学級キャラクター」では、イメージをすりあわせるなかで、他の児童とのイメージの違いに戸惑いながらも受け入れる児童もいれば、気分を害してしまった児童もいた。言葉にしてさらにやりとりをして、一つのことを決めていく経験を得ることができた。

(3) 中学部：学習発表会「みんなでつなぐ聖火リレー」

パリオリンピックにちなみ、聖火リレーや競技のストップモーションアニメを制作した（図6）。教室とベッドサイドをつないで、同時刻での制作を計画していたが、つなぐことができたのは2回のみで生徒の体調や治療による欠席が続いた。それで



図6

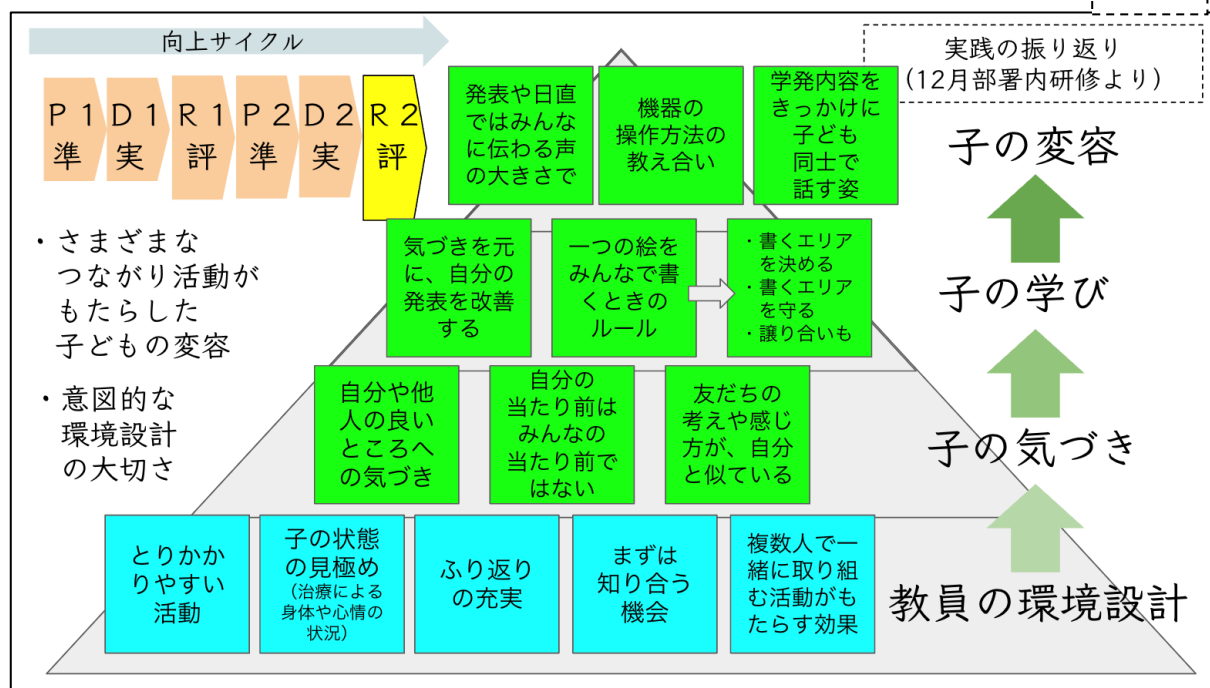
も各自で制作した動画の進捗を共有しながら、一つの作品を作り上げることができた。

II 校内研修

3 実践のふり回り

9月から12月の実践で得られたものを付箋に書き出し考察した（図7）。

図7



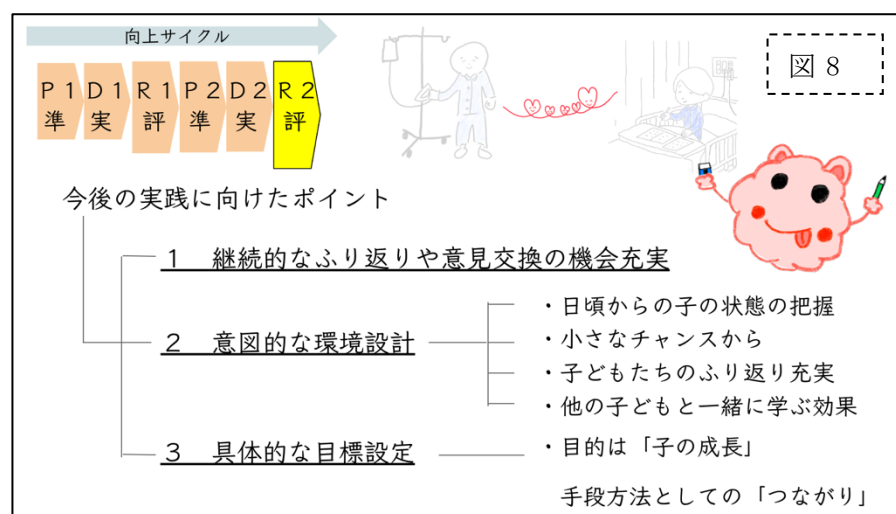
実践の全体的なふり回りから、教員の環境設計が子の気づきや学びを促し、子の変容につながるが見出された。入院している子どもに接する分教室教員にとって、「子ども同士のつながり」を生み出す、意図的な授業デザインの重要性が示唆されたと言えよう。

和田先生から実践をふり回り、言語化する経験や、子ども同士の良い関わりだけでなく、時には衝突や折衝が必要で「気持ちがざわざわする」関わりも経験できたことをご評価いただいた。

4 今後の実践におけるポイント

今後も教員間で意識を共有し、チームとして動くことが重要である。定例の学部会の中で話し合ったり、学期末に話し合いの機会を設けたりしたい。また、つながり活動を通して実現したい子どもの姿を、具体的に目標立てたい（図8）。

和田先生からは「相手にされたことでどんな気持ちになったのか。それを相手にどう伝えるか。」「自分が相手にしたこと、相手がどんな気持ちになったか想像する。」ことができる活動をご提案くださった。



Ⅱ 校内研修

5 まとめ

本稿は、令和6年度実践報告会での報告と、和田先生からの助言をまとめたものである。アドバイスいただくことで、実践に言語化を促す活動を取り入れたり、次回への期待を抱くことができるように工夫したりするなど、活動の視野を広げるとともに、深めることができた。

また、実践を通して、児童生徒の体調や気持ちの状態を日頃から把握しておくことの大切さを再認識することができた。治療をはじめ、家族関係やその日の出来事などで、子どもの体調や気持ちは変化していく。促したり寄り添ったりして活動を調整・変更していく対応力は、病弱教育における大切な力の一つと言えよう。